
アリス・イン・アンダーランド

水島智明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリス・イン・アンダーランド

【Nコード】

N1149U

【作者名】

水島智明

【あらすじ】

とある事件を契機に水面下で建設された地下帝国『アルケミスト』。地底から天に向けて、女性のくびれのようにしなやかに伸びる漆黒の双塔を中心に、豪華絢爛な居住区と無機質な工業施設がそれぞれ南北に配置され円状に層を成しており、固い城壁で閉ざされた中心部の外はアドリア海から直接引かれる海洋運河が広がっている。海洋の外周を囲むように形成された土地は、例の事件の関係者が大半を占める地帯で、土地の半分が未だに下水道処理機能を有しておらず感染症が絶えず発生する劣悪な環境での生活を強いられ

た者達の拠り所となっている

その中で異質とも思える程可憐な少女が、風に靡く金色の髪を両手で押さえつつ漆黒の双塔を見上げていた、その目に一縷の望みを秘めながら。

プロローグ

銃声と嬌声、それらはアリスにとって生への前奏曲であり、死への練習曲でもあった。だからこそ、それらが奏でられている場所には、大抵、少女の姿が見受けられたし、逆に、それ以外の比較的健全な場所は、少女にとって敵地であり、最も忌むべき敵でもあった。故に、自分にとって快適な居場所　死と隣り合わせの地　で、何時もと変わらず少女は任務についていた。

どしゃぶりの雨が降り注ぐ中、少女は金色の髪に伝う雫を鬱陶しげに払いのけつつ物陰で機会を窺っていた。

見渡す限り瓦礫の山と化した石造りの家々をさほど感慨も無さげに眺めると、懷から無線機を取り出し、艶やかな唇を上下させ、

「こちら黒手組のアリス」マーガレット、対象を目視で確認、状況を開始する」

「了解」

無線機を土くれに投げ捨てると、擦り切れた布を身に纏う者達に向けて少女は走り寄った。

右手にリボルバータイプの拳銃を握り、その銃口は抵抗する術を持たない集団へと向けられ、そして、弾丸が放たれた。

止めどなく放たれる弾丸は意志を持たずに直進する。しかし、それは如何なる理由であろうとも、銃口から先に放出されれば否応なく使用者の意志を纏う。破壊という意志を。

一人、また一人と、土色に濁った水溜りの上に赤いシミを残しては倒れていく。ある者は意味の分からない言語で威嚇し、またある者は無抵抗に肢体をさらし、そして、ある者　最後に残った少年は、じつと、少女の顔を眺めた。

予定通りに行けば難無く終わる任務に、一瞬の陰りが見え始めた。そう、少年の顔はただ一人肉親である弟に瓜二つであったからだ。

屈託なき笑顔で見つめられている所為か、銃口を向ける手に自然

と震えが生じる。

（早く殺せ、さもなければ監視役に殺されるぞ）

内なるもう一人の自我が執拗に私に声をかけてくる。

理屈では分かっているけど、どうしても、引き金トリガーを引くことが出来なかった。捨て切ったはずの情が萌芽するのを自覚する、この少年は撃てないと。

もしかすると、この時の選択は少女が見せた最初の良心であり、最後に見せた無垢な笑顔であったのだろう。

甲高い金属音が鳴り終えると、水溜りにまた一つシミが刻み込まれた。

第1部

目を覚ますと、そこは薬品の香りが充満した純白の部屋であった。分厚いカーテンで仕切られた簡易ベッドの上で横たわる私を、切れかけの白熱電球が心許なく照らしていた。

私が目を覚ましたことに気付くと、隣でパイプイスに腰かけていた初老の男が身を翻した。

「目が覚めたかい」

自分より幾分か背が小さいにも関わらず男は妙な威圧感を保持していた。おそらく、所々露出している男の体軀には無駄な肉が無く、引きしまった体軀であったからだろう。

「そんなに身構えなくても大丈夫」

すると、男は勢いよくカーテンを開け放した。

それを皮切りに、無数に現出する眩い光が私の目を蹂躪した。

「.....すごい」

徐々に慣れてきた視界に広がるは人々の群れ。そびえ立つ漆黒の塔を中心に高層のビルが円状に層を成し、上空は異様なほど光を帯びていた。

「ようこそ、地下帝国『アルケミスト』へ」

そして、男はカーテンを閉めた。それに合わせ冷徹な表情になる。「話はユニから聞いている、上の世界で行き倒れていたそうじゃないか」

訝しげに私の姿をじつと見つめる。

徐々に男が私に近づいてきたとき、部屋のドアが乱雑に開け放たれた。

「私の古い友人に何をする気かね」

挑発的な言葉を紡ぐ者は、瀟洒な声と反比例してどこかあどけなさの残る少女であった。髪は絹のような金色のセミロングで、菊のような花を模ったエンブレムを誂えたセーラー服から伸びた手足は、

真つ白く光っていた。

「申し訳ありません、ユニお嬢様」

男は少女の言葉にばつが悪そうな顔をしながら答えた。

「分かればいいのだよ」

ユニはそう言うと、男に対して部屋の外に出るようにジェスチャーを送った。それを見た男は恭しく頭を垂れ、そして、部屋の外に出た。

男が部屋を出たのを確認すると、少女はあどけなさの残る顔で私の顔をじつと見つめた。過去を慈しむかのように視線を通わせてくる少女の手には、一通の手紙が握られている。

「君と再び出会えたことを祝福したいのもやまやまなのだが、急ぎの用ができてしまつてね」

そう言うと、手にしていた手紙を私の掌にそつと乗せた。

「何かあつたら、外に待機している遠藤に聞いてくれ」

すると、少女は足早に扉の方に向かった。

「あの………」

足早に立ち去ろうとしていた少女に向けて、何を聞くべきか俊巡している、少女はこちらに振り返り、そして、凜とした声で告げた。

「自分が此処こゝにいる理由を知りたいのだろう」

一瞬の沈黙の後、私は頷いた。

「自分の犯した罪を償うため、とでも言つておこうか」

それが何を意味しているのかを理解するよりも早く、少女は扉の閉じる音と共に去った。

男は機嫌が悪そうに、私の懷の部分に指を指した。

「ところで、その手紙は読んだのかい」

胸元に挟まった純白の手紙を取り出すと、それには蚯蚓ののたつたような文字が綴られていた。

（第三地区のバー『ツヴィンガー』のマダムに、私の名前を告げて

くれ)

メモを男に見せると、あのお方は人使いが荒い、と小声で毒づいてから、すぐさま身支度を始めた。

「そろそろ消灯の時間だ。それまでにバーに行かないと、いろいろと厄介だから」

「あの、私は何をすれば？」

手持無沙汰に佇むのも気が引けたので、何か些細なことでも手伝えるかどうか男に尋ねると、至極真面目な顔で物騒な言葉を吐き捨てた。

「自分が死なないように祈ってるだけでいいよ」

そして、男は別室に移動した。

しばらくすると、男は金属の擦れ合う音を出すハンドバッグを持つて、部屋に戻ってきた。

「さあ、出発だ」

男は私の手を引いて、部屋を出た。

等間隔に配置された両側の照明に加え、終着点の見えない廊下を進んでいくにつれて、次第に、その場にずっと佇んでいるような感覚に陥った。そんな中、何の迷いも無く突き進んでいく男に一抹の安心感を得たが、それも一瞬のことであった。

「扉は何処だったっけ……」

と、大して問題無さそうに男は呟くと、バッグからリボルバータイプの拳銃を取り出し弾を一発込めた。

「しかたないな、また始末書書かされるけど」

男は床に向けて弾丸を撃ち込んだ。

刹那、先程まで無限に続いていた廊下は跡形も無く消しとび、その代わりに現れたのは木造の簡素な作りの一室であった。

轟音が部屋の中に響き終えてから男を一瞥すると、その頬に一筋の血が流れていた。

男は頬から滴り落ちる鮮血をもろともせず慣れた手つきで部屋の扉を開けると、床に転がって写映機みたいなものを手にとって、

バッグの中にしまい込んだ。

目前で起こった現象に呆気にとらわれていた私を見て、男は朗らかに笑い、

「これは単なる立体擬似映像で私達に錯覚をもたらしていただけだよ。この傷は、それを壊したときに破片が飛んできただけだから大丈夫」

へえ、と私が納得していたら、「車をとってくるから、此处で待っててね」と男は森の中に姿を消した。

一人取り残された私は開け放たれた扉から外に出た。素肌に白衣を羽織っているだけだったので、時折吹きつける冷気は身に堪えた。（私は何でこんな場所にいるんだろう）

ふと、脳裏によぎった。

（行き倒れていた私を介抱しただけだと言われたけど、そもそも、なんで私は行き倒れていたんだろう）

考えてみるが、一向に答が浮かばない。

（あの少女にもう一度会って、話を聞こう）

そうごちた私の目前に、タイミングよく車高の低い二座席の車が現れた。運転席から顔だけぬっと出して、

「お待たせ」

と、助手席のシートを掌で軽快に鳴らしたので、私は急いで乗車した。

「そうそう、窓は絶対に開けちゃだめだよ」

全開にしてあった窓を閉めると、男はそれを確認し、淀みない動作で車を発進させた。

轟音が薄暗い路地に響き渡った。目的地に近付くにつれて道幅が狭くなっているのか、徐々に車のスピードが落ちて行った。車が薄汚い路地を通る度に、これ見よがしに乞食の群れが僅かに小銭の入っている空き缶を窓の外から叩きつけてきた。その所為か路地には絶えず異臭が立ち込めていた。それを車内から逃がそうと窓を開け

ようつとするが、血眼になって小銭をむしり取ろうとする老婆と視線が合い、すんでのところだと思いつまった。

景色は次第に耽美的なネオンに彩られた幻想的なものとなった。相変わらず異臭が立ち込めていたが、それに、男を惑わすための香水が混じり合つて、更に不快な臭いを演出していた。

その街路の一角に、身を潜めるように佇んでいる無骨な建物の前に車を止めると、中から妙麗の女性が顔を出してきた。

「あら、遠藤ちゃん、いらつしやい」

「ご無沙汰しております、マダム」

遠藤と呼ばれた男は愛想笑いを浮かべると、私に車から出てくるように言った。

女性は私の眼を見ると、突然素つ頓狂な声をあげた。

「こんなことをしたのは、ユニの仕業ね」

頭を抱えるしぐさをした後、自分の身の回りを隈なく見渡した。

「この子が失踪したと近衛兵が知つたらどうなるか」

「その点はご安心を、監視区域を避けてきたので」

「そう、ならいいけど」

女性は再び私に振り返った。しきりに嘆息する女性の顔に疲労の色が見え隠れしている。

「しばらく、此处で預かるわ」

訝しげに女性を見ていると、男が耳打ちをしてきた。

「マダムの言う通りにするんだよ、この界限においてそれは鉄の掟だからね」

人垣を掻き分けながら消えていく男の姿を遠巻きに見ていたら、

マダムは先程までの態度から一変し、高圧的に告げた。

「ぐずぐずしてないで、さっさと中に入りな」

言われるがままに、私はマダムの後を追った。

奇抜な衣服に身をつつんでいる女性たちが右に左に忙しく動いている姿を想像していたのだが、部屋の中に人の気配は全く無かった。

その代わりに、必要最小限の家具が置かれた部屋の奥には、個人用の射撃場が横一列に備え付けられていた。

それぞれのデスクの上には細身の自動式拳銃、また、その横にネームプレートが置いてあったが、どれも無記名であった。

マダムはその中の一番左のデスクに私を誘導した。

目前に下げられた人型の紙と目が合う。

頭の部分だけ綺麗に撃ち抜かれた人型は、時折、隙間風に揺られ、その身を左右に振っていた。

目下の白銀の拳銃は何時でも使えるように手入れが行き届いており、所々、使い古した跡が付いていた。

「ここで生き残るための鉄則を三つ教えてやろう」

私の右隣にマダムは立つと、置いてある拳銃を手に取り、二、三発と立て続けに打ち放った。どの弾も綺麗に体の中心を撃ち抜き、硝煙がうつすらと部屋を漂った。

轟音が耳の中で反響するのが収まったあと、マダムは淡々と続けた。

「ためらわない、逆らわない、死なない」

マガジンを取り換え、再び、数発撃ちこむ。しかし、今度は私に向けて打ち込まれた。

撃たれたという自覚をした頃には、すでに、腹部にじつとりと鮮血が滲み出ていた。しかし、被弾した痛みはあまり感じなかった。

マダムは手にしていた拳銃を懷に入れ懷の血を舐めとり、

「単なるジョークだよ」

と、マガジンを手際よく取り出すと中から弾丸を一つ取り出し、私に手渡した。ゴム製の弾丸の先端に切れ込みがあり、そこからフレッシュな果実の香りが放たれていた。

「ここで生きていく決心がついたら、そのネームプレートに自分の名前を書きな。引き返すなら今のうちだよ」

マダムは胸ポケットからペンを取り出し私に手渡した。

（引き返すも何も、私には返るべき場所すら分らないのに）

一体どれくらいの時間がたったのだろうか。揺らぐ意志に身を委ねては、真理を追い求めるための機会を手放そうとする自我に、愚昧さを感じずにはいられなかった。

ただ、今の私に必要なものは自我を確立させるための安寧の地、欠落した私の記憶を代わりに埋めてくれるパートナーがいる地、それだけであつた。それさえあれば、私はこの混沌とした街でも生きていける。根拠のない強がりには、あたかも、生ける道化師を演じていた。

「私は、いつも独りぼっちだ」

独白に似た声は、自然と私の口から紡がれた。すると、部屋に中性的な声音が響いた。

「それが君の選択ならば、私は拒絶しない。君が私を求める限り、君の相棒^{パートナー}で居続けることを誓おう」

声の発せられた場所は、ネームプレート^{ネームプレート}の置かれた真隣に置いてある白銀の拳銃からであつた。

マダムは拳銃に向けて言い放つた。

「その姿だと、今のアリスには適していないんじゃないかな」

「そうか、それも一つの道理だな、具現化^{ボツブ}」

先程拳銃の形をしていたものは、年の端もいかない黒髪の男の子に変化した。ランニングシャツにダメージジーンズとラフな格好で登場すると、年齢に相応なほにかんだ笑顔で私に一礼した。

「私の名前はクラフト」

マダムは懷から煙草を取り出すと、満足げな顔で紫煙をまきちらし始めた。

「こいつは使用者から微弱に発せられる記憶領域の電気信号^{パルス}を読み取り、それを自身の体を受容体として増幅し、己の人体構造を再構築する事で記憶を具現化^{ボツブ}することができる。つまり、お前が記憶しているものなら、ある程度の制約はあるが何にでもなれるっていうことだ」

クラフトは愚痴をこぼした。

「動きづらいですね、この姿」

「しょうがないだろう、だったら、そこら辺をうるちよろしている黒い奴になるかい」

「害虫は苦手です．．．．．」

納得がいかない様子でしばらく仁王立ちしていたが、マダムはただそれをじっと眺めていた。

「それじゃあ、この街を案内して差し上げましょう」

痺れを切らしたのか、クラフトは私の手を取るとマダムの了承を得ずにさっさと部屋から飛び出した。引きずられながら、私はマダムの顔を見た。

改めて見ると、やはりマダムは美しかった。黒衣から延びる手足は、白磁の様に艶やかで、滑らかであり、この街で生きる者としてそれは身につけなければならぬ必要最小限の要素であると無自覚に伝達しているような、そんな感じがした。

「そうそう、これを君に渡さなければならぬ」

先程ペンを出した所から、碧色の宝石に彩られたネックレスを取り出し、私に優しく付けてくれた。

「うん、似合ってる」

宝石を指の平でなぞりながら私は尋ねた。

「これは何ですか？」

「君にとって、必要なものさ」

マダムはそれ以上何も語らず、ただ、私の出発を見送ることに徹していた。

いつてらっしゃい

扉から出る際、そんな声が聞こえたような気がした。

薄暗い路地裏に鐘の音が響き渡った。建物の中に垣間見える塔から発せられる甲高い音は、天井を所狭しと埋めていた光源の消失を意味し、また、宵闇を好むこの界限にとってより一層女性達の肢体

を妖艶に際立たせるには最も適した現象であることも含意していた。サンドイッチマンの声、道の中心で踊り狂う娼婦や道端で倒れる男たちの当ての無い呻きによって、より一層喧騒が激しさを増す一方で、隣に並んで歩くクラフトの横顔は色を正していった。

「これがこの街で生きる者たちさ。ある者は情に溺れ、ある者は薬に溺れ、そして、ある者はこの現状を嘆き悲しみ、反乱の旗を掲げ、名誉の死を遂げた」

「.....」

「皆、希望を糧に生きることを排除された爪弾き者なんだ。不変の種族を受け入れ、互いを快樂という表面上の要素で補い、その欠落を無に帰そうと努めている。でも、そんなことはできる訳が無い」

「何故？」

建物の間から生み出された一際冷たい風が、私の体を包んだ。

「この世の中には絶対的なものがある、それが何か君に分かるかい？」

突然、質問され返されたので、私は黙ってしまった。

「それは、『死』だ。『死』は平等に、分け隔てなく訪れる」

クラフトは窓を開けたまま仮眠をとっていたイエローキャブの運転手を叩き起こし、行き先を告げ、乗り込んだ。私も後に続いた。

「でも、あるものには死が訪れない」

あぜ道を通りながら、度々上下に揺れるサングラス越しの眼光は鋭さを増していった。

「それは？」

「思想だよ」

クラフトは後部座席の背もたれにもたれかかると、そのまま可愛いらしい寝息を立て始めた。無垢な表情を浮かべながら眠るクラフトに向けて、私は尋ねた。

「私は一体何者なの？」

問いは沈黙によってかき消され、車は道なき道を走り続けるだけであった。

塔に目を向けると、そこには変わらず得体のしれない脅威じみたものが潜んでいた。

この世界の全てを見下ろすことが出来る塔の最上階に、壮年の男はいた。淡いカラーの付いているサングラスを掛け、職人の手によって丹精に作り上げられたこの世に又とない高級スーツを身に纏っている男は、塔そのものであるかのように微動だにしていなかった。「社長、ユニお嬢様がお取次ぎ願いたいと」

「通せ」

プレジデントルーム

社長室に機械によって拡張された女性の声が響き渡った。男はワイングラスをデスクの上に置くと、気だるげに腰を上げた。

ノックの音と共に、少女は部屋に入った。

「お久しぶりですね、お父様」

忌々しげに少女を見ると、男は窓辺に移動した。

「その呼称は何時になつたら変わるのかい？」

「永遠に変わるはずがありません、血縁関係が存在する限り」

少女はデスクに置いてあった年代物のワインボトルを無造作に開け、そのまま一気に飲み干した。ワインを唇から滴らせながら少女は苦い顔をした。

「まずいですね、これは」

「お前の様な下賤な者に、その味は分からないだろうね」

「それも、そうですね」

あっけらかんとする男に、少女は告げた。

「アリスがこの街にまだいた事をご存知ですか？」

アリスという単語を聞いた途端、男は眉間にしわを寄せた。

「お前はその要件を伝える為に此処に来たのか、馬鹿馬鹿しい」

男は壁に備え付けられた大型モニターの電源を入れた。そこには、一台の黄色い車が走っている映像が様々な方角から映し出されていた。

「すでに奴を始末する手はずは整えてある」

「そんなことをしたら、彼女の脅威の矛先はいずれ貴方に向かいま
すよ」

「言われなくとも、分かっているさ」

男はモニターの電源を切ると、少女を一瞥した。

少女の要件はそれだけだったようで、それ以上何も言わず、部屋
を後にした。

少女と入れ替えに、うら若い女性が手に膨大な資料を携え入って
きた。

「いいのですか、あの子は貴方にとって……………」

「お前の知ったことか」

資料を受け取ると男は秘書にべの無い表情を浮かべた。秘書が
若干不満げな顔をしながら部屋を出ていったのを確認し、男はグラ
スに残ったワインを一気に呷った。

「まずいな……………」

男の呟きは、窓から入り込む静謐な空気に溶けていった。

「標的は非監視区域を抜けて、幹線道路に出たよ」

複雑に絡み合うコードの中に溶け込むように、いや、必然的にそ
うなってしまう程小柄な少年は、モニターに出力された地図の上を
動き回る赤い円を、指の腹で優しくなぞった。少年は七色のロリポ
ップを大して美味しそうに味わう訳でなく、かといって、べらぼう
に嫌悪感を呈する訳でもなく、ただ、その行為を活動の部分的な足
枷としているかのごとく何本も舐め続けていた。

「了解、では、標的がこちらの追跡に気付く蓋然性は？」

運転手の男が声を荒げた。

「そうだね」

赤い点の軌跡を辿りながら、標的の行動原理を逆算した。

「消灯時間になっているにも関わらず幹線道路に移動したというこ
とは、私達をおびき寄せる以外の何物でもないだろう」

「では、意図的に仕組んでいると？」

「そうだろうね」

少年はPCラックの隣に備えられているキャビネット上の写真立てに視線を合わせると、ロリポップを舐めるのを止め、そこに映し出されている少女に向けて銃を撃つ仕草をした。

「かつての同志に手をかける事にためらいは無いのか？」

「仲間を殺すような奴を同志と呼べるのかい、君は？」

「それは事故のはずでは……」

「これ以上議論した所で何も変わらない。これが僕たちの運命なのだよ」

「……わかってるよ、俺はバックアップに徹するまでさ」

モニターの情報を運転手側の男に委託すると、少年はミニバンの扉を開け、時速数百キロ以上出ている車から無造作に飛び降りた

男は車から飛び降りた少年に目もくれず、赤いポイントの軌跡に沿って車を走らせた。

車内に内蔵された立体音響型のスピーカーから流れる案内によると、今、私達が通りかかっている場所は、中産階級の住む地下都市中心部の商業地区と、その外部の労働者階級の地区を繋ぐ、唯一の橋であるという。

橋の下には、大型の物資を運搬するときのみ使用許可の下りる海洋運河が広がっており、車窓を開けると、確かに、潮の香りと、波のたゆたう音を認識する事が出来た。

しばらく進むと橋の終端が見えてきた。標準的な成人男性程の大きさの足跡が路面に模られた所に車が停まると、固く閉ざされた扉の隣にあるプレパプ式建物から強面の男性が歩み寄ってきた。

「運転手の身分証明書と、通行許可証を拝見します」

顔作りのわりに物腰柔らかな男性に向け、運転手は慣れた手つきで、

「ほらよ」

と、無愛想な態度を示しながら許可証を手渡した。男はその態度

を意に介さず、事務的な動作でそれを受け取ると建物の中へと戻っていった。

程なく、瘦身の女性が湯気の立つ紙コップを盆に載せこちらに向かつてきた。

「しばらく時間がかかるからコーヒーでも飲んでいて下さい。インスタントの奴しか無くて申し訳ないけど」

運転手は待つてましたと言わんばかりに手早くそれを受け取ると、一息に飲み干した。礼を言いつつ私もそれを受け取り、少し乾いていた喉を潤そうとした途端、妙な既視感が湧いてきた。それは射撃場でマダムに撃たれ、一瞬死を覚悟した時に似た、死の直前の間であつた。本能的にそれを飲まずにいると、隣でそれを飲もうとしていたクラフトが急に訝しげな顔になり、

「どうしたんだい？」

と、尋ねてきた。

「何か、嫌な感じがする」

先程感じたことをありのまま話すと、クラフトは、「なるほど」と、呟きながら、運転手に目配せした。すると、至って健康そうな運転手の顔が急に青ざめ、悲痛な叫びと共に口から泡を吐き出し始めた。女性は激しく痙攣する運転手に伴って揺れる車内を覗き込むと、極めて冷静に、

「何故、あなた達はそれを飲まないの？」

と言い、後部座席のドアを勢いよく開け私を車から出そうとした。「くそつ、単なる個人の逆恨みだけでなく、近衛兵もすでに手を回しているのか」

と言うと、その発言に覆いかぶさるようにして幼い少年の声が響き渡った。

「近衛兵はまだ動いていないよ、彼等は高みの見物さ。それは、まあ、いいとして、単なる個人の逆恨みってどういう事だよクラフト。まるで、僕が悪者みたいじゃないか」

建物から姿を現したのは強面の男の代わりにパジャマ姿の少年で

あった。ロリポップを加えた少年は、慟哭しそうな程緩んだ目を両手で擦りながら高らかに唱えた。

「さあ、^{シヨウタイム}とっておきの時間の始まりだ」

少年は自分の前に立つ女性を忌々しげに見つめると、懷から小型の刃物を右手に持ちその背に向けて素早い動作で振り下ろした。女性の四肢はしばし小刻みに震えていたが、間も無くうつ伏せの状態で地面に崩れた。

女性はそのままピクリとも動かなくなった。彼女の背は左右綺麗に割かれ、白い骨と鮮やかなピンク色の臓物が露呈していた。少年は女性の亡骸に何の感慨もなさげに近づき、焼けただれた右手で女性の腹腔を弄ると、死んでもなお収縮運動を続ける臓器を取り出し、徐にそれを口の中に運んだ。

「悪くない味だね」

少年は僅かに目じりを下げると、一口だけ食した臓器を地面に投げ捨て、本来ならば付いているべき絶縁体の柄の無い電気メスを片手に、にやり、と、下卑た笑みを浮かべた。

「君はどんな味かな、アリス」

肉の焼け焦げた臭いが鼻腔に充満し、込み上げてくる嘔吐感に耐えきれなくなつた私は車内に胃の内容物を吐き出してしまった。嘔吐物から放たれる異臭は、さらに、新たな嘔吐感を生みだし、私の感覚を麻痺させていく。

「こつちだ、アリス」

クラフトは^{ただかま}蟠っていた私の手を取ると、少年と反対側の扉から車外に出た。

「逃げたって無駄だよ」

固く閉ざされたゲートから逆方向に逃げようとしたが、白いミニバンが私達の行く手を塞いだ。

「くそつたれ」

ゆつたりとした動作で迫る少年によって、私達は橋の欄干に追い

詰められた。逃げ場所を失ったと悟った時には、すでに、少年の電気メスは目前に迫っていた。

「これで終焉だ」
フィナーレ

迫りくる死を目前にし、反射的に目が閉じる。再び肉の焦げ付く臭い。

何時になっても訪れない痛みを不審に思い目を開けると、クラフトが私に覆いかぶさり、少年の一閃を身を呈して防いでいた。

「どけよクラフト、僕の目的はあくまでアリスなんだ」

「彼女を傷つける事は、この俺が許さない」

再び振り下ろそうとしていた右手の動きが宙で止まった。

「どうして彼女を庇うんだ？　そこまでする必要はお前にないだろ
う？」

「そうかもしれないな」

一拍置いて、クラフトは続けた。

「それでも、彼女は私を必要としてくれたからだ」

「そうか．．．．．無粋な質問だったね」

少年は深いため息を漏らし、

「さようなら、クラフト」

何度も何度も、電気メスから発せられる高周波電流はクラフトの背肉を焦がし、その度に呻き声がもれ、私を抱きしめる力が弱くなっていた。

「どうして．．．．．」

圧倒的な脅威の前になす術を持たぬ私は己の無力さを噛みしめつつ、心中をありのまま吐露した。クラフトは一瞬だけ戸惑いの色を見せると、赤子に諭すように告げた。

「それが君との約束だからだ」

と、震える声で言い残し、その場に崩れ落ちた。

「あらら、もう終わり。もっと楽しませてよクラフト」

少年は執拗にクラフトの体を切り刻みながら、ありったけの罵声を浴びせ続けた。本来の目的で有るはずの私に目をくれず、眼下の

クラフトを玩具の様に扱っている。

次第に、私の識閥野が取り払われ、純粋な怒りが私を支配し始めた。自分の奸知の無さに対する怒り、自分より何歳も年下の少年に対して何もできずにいた怒り、そして、何より記憶の欠如の代替者としての相棒としか考えていなかった怒り、それらの怒りは、互いに交差し、とある結論に帰依した。

（強くなりたい。誰にも侵されない、圧倒的な脅威になれる程に）
願いに呼応して、何かが内側から意識に干渉してきた。

（だったら俺と代われ、アリス）

しわがれた声音のそれは私の意識に入り込んできた。生まれたての赤ちゃんのような、柔らかで無垢な暖かみを帯びているそれを受け入れると、私の意識は、消失した。

少年の動作によって生み出された風籟の旋律は、少女の姿が鮮血に染まる度にその音階を上げていった。涎を撒き散らしながらその行為に耽る様は、快楽を最大限に享受する方法を本能のままに行動する事によって見出そうとする、精通したての少年そのものであった。

訪れない少女の悲鳴に、少年の表情は険しくなっていく。鬱憤を晴らすために、倒れたまま動かない少年に蹴りを入れようと足を振り上げるが、突如、巻き起こった海洋からの風によってバランスを崩し、仰向けに倒れた。その反動で、電気メスが手元から離れた。
「ついてないなあ」

砂利の混じった頭髮を掌で払い落とすと、電気メスを取るために起き上がった。しかし、手元から離れていった電気メスは何処にも落ちていない。前後左右を隈なく探すが、やはり、何処にも見当たらない。目前に存在するのは、不動の少年と、不敵な笑みを浮かべる少女の姿だけ。

「お前の探しているのはこれだろう？」

その言葉が少女から発せられたものであると少年が気付いた時には、すでに、少年の懷まで距離を詰めていた。少年は咄嗟の判断で

ステップバックをするために足に負荷を掛けるが、片方の足には上手く伝わらず、尻餅をついた。右足を見下ろすと、膝から下が切り取られ、傷口から止めどなく出血している。傷口は他にも体の所々に点在し、着衣は殆ど炭と化していた。

無言で傷口を眺める少年に目をくれず、少女は足元の少年に蹴りを入れた。

「何時まで寝ているんだクラフト。まだお眠の時間は始まってないだろ」
シヨウタイム

片膝を宙に浮かせて座る少年の顔に、戸惑いの色が見え隠れする。対象を高温でバターを溶かすように斬り裂く剣戟を用いて深手を負わせたはずの標的の所作は、却って、連撃を与える前より機敏になっているからだ。

込み上げる違和感を拭い去ろうと、少年は片方の足で跳躍し距離を保った。相対する少女の衣服には、確かに、焼け焦げた跡が残っている。

表層を分析する限り少女に特殊な加工が施された痕跡は無い。舐めていたロリポップを一旦口から離すと、少年は宙に向け咆哮した音として認識出来ない周波数まで上がると、橋の支柱が次第に大きな揺れを生みだし始めた。

少女が揺れを最小限に緩和するべく地面に手を付いた隙に、少年は一気に詰め寄った。

「終わりだ」

少女の手に握られていた小口径の自動式拳銃から発せられた声であると認識した時にはすでに、遊底は後退し、弾丸が少年に向けて放たれていた。振動のおかげで少女の照準がわずかにずれ、初弾は少年の右肩を貫通したが、少女の追撃は終わらず、胸、腕、足、至る所に風穴が開けられていった。

内臓が破壊された所為で少年の唇から鮮血が滴り落ちた。

「この僕がこんな体たらくだなんて……………」

血飛沫まみれの体を見つめ、少年は地団太を踏んだ。与えられた

傷の痛みを噛みしめている訳でなく、ただ、自分自身の無様な様を見せってしまった事に対する嘆きを呟いているだけであつた。少年の顔色から余裕が消え失せ、額から零れる冷や汗は雫となり、地面に跡を付けた。

少女は自分の足元で咽び泣き始めた少年を見下ろすと、遊底をスライドさせた。

「僕を殺すのかい？」

引き金に指がかかる。千切れた指先で額を抑えながら少年は嘆息した。

「せつかく君の出生を教えてあげようと思ったのに」

引き金に指を引っかけたまま、少女の動きが止まった。これは好機と少年が捲し立てる。

「僕を殺したら、せつかくの機会を無下にすることになるよ」

少年は笑顔を引きつらせながら、自分に向けられた銃口を凝視した。

「だが、障害の一つを排除する事に変わりないだろう」

「えっ？」

しわがれた声で話す少女は、ためらいなく引き金を引いた。弾丸は少年の耳元を通り、地面を抉った。死を免れた事に安堵した少年は、そのまま気を失った。

沈黙が訪れる。少女は銃把を強く握りながら傷だらけの拳銃に話しかけた。

「久しぶりだな、クラフト」

拳銃は答えず、代わりに自身の遊底をスライドさせた。その返事を聞き取った少女は掌で銃身を優しくなでると、くすぐったそうに鋼鉄の塊が身を震わせた。

戦いの緊張が収まったのか少女の顔に笑みが浮かび始めた。

「何故、彼を殺さなかったんだい？ また君を襲ってくるかも知れない」

真下で無防備に肢体をさらけ出す少年を一瞥すると、少女は、

「さあね」

風に靡く金色の髪を手で押さえつつ、拳銃に目配せした。

「それに……………」

「それに？」

少女は一際美しい笑顔を浮かべると、照れくさそうに、

「その時は私を守ってくれるんだろ、相棒」

と言うと、それ以上何も語らず、掌で可愛らしい寝息を立てる相棒に、そっと、口づけを交わした。

白いミニバンの運転席から短身の男が姿を現した。頭髪は年相応の白髪に、金細工の施された片眼鏡をそつなく掛け、杖をつきながら少年の元に歩を進めると少女たちの目前に立ち、

「この度は申し訳ない事をした」

と、慇懃な礼をした。少女は額に皺を寄せながら、

「礼はいらねえ、目障りだ」

と、手を前後に払った。男はやや曲がった腰を労わるかのように浅く礼をすると、男は少年を抱えてミニバンの中へと戻っていった。徐々に遠ざかっていくいく男に向けて、クラフトは姿を拳銃から人間へと変えると、

「もう一度、僕たちと共に革命を起こす気はないのか？」

と、男に懇願するが、

「この子が君に敵対心を抱いている限り、それは叶わぬ夢だ」

と、片杖の先で少女を指し示すと、ミニバンの中へと姿を消した。少女は来た道に戻っていくミニバンが見えなくなるまで、目前を睨み続け、そして、憎々しげに呟いた。

「そろそろ限界か」

少女の吐息が激しくなり顔が紅潮し始める。クラフトは胸元にもたれ掛かる少女を抱きとめると、少女の額から滲む汗を掌で拭った。周囲に張り廻っていた殺気が消失し始め、代わりに、少女に異変が訪れ始めた。

虚ろな目でクラフトを見つめると、首筋に腕を巻きつけ、焼け焦げた着衣から僅かに窺える胸を押しあてた。

「おい、アリス」

クラフトの言に触れず、少女は自身の体を執拗に押し当て、耳元で囁いた。

「いいでしょ、クラフト」

傷ついた相棒を癒そうと、少女は軽くキスを交わした。クラフトは少女が震えている事に気付くと、ゆっくりと唇を離し、

「強くなりたいか」

と言い、少女を見つめた。少女は無言で俯き、震えた声で、

「私は、強くなれるの？」

クラフトは少女を両腕で抱きとめながら、

「君の覚悟次第だ」

と言い残すと、眠りについた。一人残された少女は、固く閉ざされたゲートが徐々に開いていくのを見つめた。全て開き終わると、内側から人影が現れた。それは出会ったときと同じ格好の、金髪の少女であった。

ユニは橋の上の惨状を見渡すと、橋の上で横たわる死体に近づき、各々に対して黙祷を捧げた。

「無事で何よりだよ、アリス」

私の頭をなでつつ、隣で眠るクラフトを背負うと、

「じゃ、そろそろ帰ろうか」

と、扉の付近に止めてある車に戻っていった。クラフトはまだ眠っているのか、おとなしくその身をユニに預けていた。私は遅れないように後ろを追い、そして、呟いた。

「強くなりたい」

私の声が聞こえたのか、ユニを振り返った。

「そうか．．．．．なら、私の命令に従うと誓えるか？」

ユニは虚空を見つめると、再び、車の方に戻っていった。私は目前を進むユニの背に向けて、強く叫んだ。

「はい」

ユニはうつすらと笑みを浮かべ、

「じゃあ、ついてこい」

といった。私は宵闇に映える漆黒の塔を見上げながらその言に従った。

第2部（前書き）

2
年後

第2部

（2年という歳月はこの街で暮らす者達にとってどのような益を成すのだろうか）

2年前とさして変わらず、情事に耽る様を横目に、アリスは小首を傾げた。

路面に伏す人を避けつつ、大小様々な看板が放つ淡い光を全身に受ける。最初はこの行為に対して嫌悪を抱いていたが、時の流れとは無情なもので、次第に安らぎ得るようになっていった。

両手で抱え持つ買物袋には、闇市でそろえてきた新鮮な魚や色とりどりの野菜が、この街のネオンと同様に彩りを添えている。

月に一度のマシな食材を大事に抱え歩くアリスを羨望の目で見つめる大男が、手に斧を携え立ちふさがった。

「嬢ちゃん。ここを通りたかったら、その手に持っているものを乗り越しな」

大男を先頭に、路地裏からぞろぞろと栄養失調でやせ細った少年や少女が、木でできた簡素な棍棒を片手にこちらを威嚇してきた。

（またか……）

今日で3回目となる出来事に、若干、煩わしさを感じ始めたが、その一方で、同情を禁じ得ない自分がいた。

地下都市が出来るきっかけとなった事件の解決のため無条件降伏を受け入れた彼等は、罪人という形で生き残る選択を与えられた。当然のごとく、彼等は生活の質を制限され、最低限の生きる権利を与えられた所までは文面通りことが進んだが、人間というものには贅沢で、一度手にした権威や生活を容易に手放すことは己のプライドに反するのか、同族同士で排他的に生きる選択をした。

客観的に見ればその選択は浅はかなものに映るかもしれない、しかし、私はそれが愚かな選択だとは思っていない。それは、この街で暮らした2年という歳月が私にもたらした一つの結論であった。

だからこそ、私がすべき行動は一つである。

「残念だけど、その言葉には従えない」

アリスは大男の横を通り過ぎた。大男はアリスから放たれる殺意に気圧され、その場に座り込む。

「自分の選択に誇りを持つ君達に、主の祝福が訪れますように．．．」

ただ、願う。それが私の選択であり、エゴに塗れた救済なのである。

蠱惑的な街並みから隔絶されたコンクリの建物の中へと、アリスは歩を進めた。

吹き抜けのフロアには生活する上で最低限の机や籐椅子が配置されており、その半分を占める射撃場には人型の代わりに漆黒の双塔を中心に描かれた風景画が飾られ、なけなしの風情を演出していた。マダムは籐椅子にもたれかかりながら、極めて事務的に言った。

「おかえり」

「ただいま」

買った物袋を机に置き、食材を並べる。

「クラフト、準備はいい？」

「ああ、何時でも構わないよ」

買った物袋の手提げ部分を持ち、アリスは呟いた。
「^{ポップ}具体化」

その言葉に呼応し、袋から包丁へと形状が変わると、アリスは手際よく食材の下準備を始めた。

マダムは古ぼけた新聞を、開いては閉じ、また開いては閉じと、鬱陶しそうに扱いながら調理の様子を窺っていた。

「つたく、このご時世に紙を情報媒体とした存在を認められるか？」
マダムが懷からタブレット型端末を取り出し、指先で画面をフリックするが、そこに映っていたのは眉間にしわを寄せたマダムの顔だけであった。

「仕方ないですよ。ただでさえこの第3地区は情報の規制が第1、2地区と比較して厳しいですから、ましてや第一級の事件に関する情報にアクセスするなんて無謀です」

「クラフトを使役してもか？」

野菜をみじん切りにする小気味好い音が止まると、クラフトは平然と言った。

「アクセスログをホストである公安に見られたら、いずれこの場所を割り出されるぞ。それでもいいなら構わないが」

「そうかい」

マダムは一際悪態をつく、新聞に目を通し始めた。

情報屋から高値で買い取った古新聞には、地下帝国が建設される前に地上で起きた事件が記載されていたが、目的の事件は空白となっていた。

マダムは煙草を取り出すと、手早く火を付けた。

「『アリス・プロジェクト』とは一体何でしょうね……」

昨日、去り際にユニが残した言葉が気になりマダムを見るが、相変わらず古新聞に目を落としていた。

（もう寝ちゃったのかな）

一通り下ごしらえを終えたアリスは、首に巻かれた襟巻を肘掛代わりにそつとマダムに置いた。

手製の竈の中に薪を入れ火を付ける。細かく刻んだ食材を鍋に入れ、火が調理に程良い温度になる様に風を送り込むと、額から大粒の汗の雫が落ちて地面に跡を付けた。

湯気の手で翳る風景画を見つつ、籐椅子に腰かけるクラフトに尋ねた。

「ねえ、クラフト」

「何だい？」

アリスの方へと振り返ると、小首を傾げた。

「明日、第1地区に行かない？」

クラフトは咽ると、アリスに諭し始めた。

「どうやって監視の目を乗り越える気だい？ 監視区域を把握している人間を同行させた上での話なら分かるが。最底辺の第3地区から抜け出すにはそれなりの準備をしてからだな……………」

「何を言ってるのクラフト」

心底理解できないといった表情を浮かべる。

「正面突破するよ」

火を止めると、焼け焦げた野菜を紙皿に盛り合わせた。

「勘弁してくれ……………」

クラフトの呟きは、熱風の中に当てもなく溶けていった。

第三地区最南端の丘陵に身を潜めつつ、スコープ越しに第一地区にそびえ立つ壁を眺めた。ここ一週間で独自に警備の巡回ルートを調査し、作戦を練ってきた。右手の中で寒々と震えているリボルバータイプの拳銃を優しくなでながら、アリスは突入のタイミングを見測った。

モルタルの壁には門が存在しないため、第一地区に入るための経路は二つに絞られていた。まず一つ目は、壁を迂回し海洋から突入する方法であった。

第一地区と第三地区は、漆黒の双塔を中心とした資本家たちの住む地区と、緩衝剤としての役割を持つ海洋を中心にくりぬかれた、ドーナツ型の地形からなるプロレタリアートの者たちが住む領域で、それぞれ東西に割り振られている。この壁は第一地区と第三地区を南北一直線に区切っているのみで、側面の警備は海上保安隊の監視が存在するだけであった。正面からの突入を一際強化したために比較的侵入することが容易にはなるが、今のアリスは別の思惑があった。自分の力がどこまで強くなっているのかという思惑が。

二年間の歳月を自分の力を蓄えるためだけに費やしてきた。同年代の少年少女たちと街角で出くわすたびに、自分には他の道があったのではないかと思う日々もあったが、すでに、その道を選択することはできない所まで来てしまっていたという事実 人を殺めた

事実が、心の中に重くのしかかり、取り除くには大きくなりすぎたしこりを残した。人は罪を犯してまで生き残ることが許されるのか。人を殺めたという罪を贖罪することは、死者への冒瀆に値するのか。人を殺したという一つの事実が、常にアリスにまわりついて、執拗にその選択を弄んだ。

徐々に暗く沈んでいく感情を察したのか、右手の拳銃は話の接ぎ穂を見つけようと、柳の木の下で身をひそめるアリスを眺めた。

「アリス、今回の作戦が仮に成功したとして、君は何をするつもりなんだい？」

銃口に付けられた鉤爪を震わせつつ、アリスに尋ねた。

「何って．．．．．自分でもよく分からないよ．．．．．ただ」
「ただ？」

第一地区の方を眺めつつ、アリスは白い吐息を漏らした。

「謝りたいと思うんだ、私の犯した罪を許してもらえるように」

「そうか．．．．．」

アリスはスコープから目を外すと、がちり、と撃鉄の持ち上げ合図した。

「そろそろ行こうか、クラフト」

アリスたちはそびえ立つ壁に向けて歩を進めた。

暗闇に紛れるために全身を黒のジャケットで包んだアリスは、天高くそびえ立つ壁の頂上に照準を合わせ、引き金を引いた。風を切り裂く音が空をさまよい、悲しい雄叫びをあげる。程なくしてその音が止むと、アリスは二、三度手綱を引っ張り、鉤爪が壁にしっかりと引っかかっているか確かめると、サーチライトに注意を払いつつ壁を登り始めた。腕の力だけで登るのは並みの人間であつたら至難の業だが、アリスは特にそれを気にする訳でなく、淡々と登った。

壁の中腹に差し掛かるとアリスは一旦登るのを止め、後ろを振り返った。自分が登り始めた場所は、すでに米粒みたいに小さくなっていたが、第三地区の街並みはまるで光粒子の乱舞の如き輝きを絶

えず放っていた。

「綺麗だね」

独白に似た言葉は自然と発せられた。自分が暮らしていたときには微塵も感じられなかった純粹な美の世界は、この地下都市の明暗をくつきりと表現しているものであり、上辺だけの美であると察すると、アリスは途端にシニカルな笑みを浮かべた。

「何も知らないままこの場に佇めたら、もっと綺麗な世界を拝めたのかな？」

「何も知らずに生きていくことの辛さを、君は知っているだろう」
大して問いの答えになっていない返答はどことなく的を射ている気がして、アリスはぐうの音も出なかった。

「それより、早く登りきってくれ。この状態はけっこう疲れるんだ」「了解」

アリスは同意すると、まだ先の見えない頂上に向け登り始めた。

監視に見つからずに頂上に辿りつけたことに安堵しつつ、第一地区の監視状況を把握するため一旦腰を落ち着ける。新鮮な冷たい風を大きく吸い込むと、程良く疲労した体にしみわたった。

「厄介だな……情報屋の言ってた通り消灯後の警備はかなり多い」

消灯後、つまり、地下都市全土を照らす天井の光の消失は諜報機関、および、保安機関による監視から民間の監視にシフトすることを意味する。その目的は、軍部による情報の独占を抑止するという体ではあるが、実際には、一部の資本家に対して一種の娯楽を提供するためにあった。

そのシステムが作成されたのは、軍部が度重なる武装蜂起に対して治安維持特例法案を施行した所から始まる。それは、共産主義的な思想、文化を保有する人物は軍事的制裁を受けるという仕組みで

ある。この法案によって、扇動家や文人は軒並み弾圧され第三地区に隔離されたが、それによって新たに別の問題が発生した。

それは、資本主義の有益性を証明するアルゴリズムの確立であった。人々は支配される者とする者、弱者と強者に分けられる。万人が共同の利益をねん出することができないことは、すなわち、個人が結果に応じた利益を得る資格を有していることを意味する。

だからこそ、人々は排他的に生きるようになり、自分の価値を創造するための手段を模索した。そこで生まれたのが、民間の軍部介入であった。

この地下都市における行政機関は、全て軍部が担っている。そのため、巨額の賄賂を贈り、軍部に癒着することによって支配権を得る資本家たちが現れたのであった。それと引き換えに、軍部の担当する所の「監視役」を与えられた。

「監視役」それは、己の裁量で人を操れる役回りであり、一部の資本家たちは歪んだ快楽を得るために、無作為に民間人を選び抜き強姦や殺害を行った。

（生き残りたければ逆らうな）

ふと脳裏をよぎったマダムの言葉は私が初めて「女」を意識させられたことを思い出させ、私は深い闇に沈んでいくのを感じた。隣で少年の姿に変化したクラフトを横目に見つつ、冴えない意識のまま監視の方に視線を戻す。

「自分を犯した奴が、人間どもが憎いか？」

体の底から何者かが問いかけた。

「いいやアイリス、自分の力不足が憎いんだ」

右手を天に翳し銃を撃つしぐさをするとアリスは頂上から一気に飛び降りた。

「おい、まだルートを把握していな……」

「正面突破っていったら、クラフト」

一際鋭い風がアリスたちを包みこんだ。

着地時の衝撃を抑えるためクラフトを使役して大人一人を余裕で包み込める程のクッションを形成すると、アリスはそれに身を預けた。

クラフトの上に乗rittつ薄明かりに照らされている下界の様子を窺うと、大きなまばらなコンテナがうずだかく積まれた波止場には貨物船が数隻停泊しており、そこかしこに警備員が手に懐中電灯を携えて己の仕事に精を出していた。

「そろそろ、到着だ」

地面と金属がすれ合う着地音が埠頭に響く。

不審な音を聞きつけてやってきた警備員が一斉にこちらにやってきた。アリスは急いでコンテナの裏に隠れ息をひそめる。

着地痕を見つけ出した警備員の一人が無線で連絡を行ったのか、次第に警備の人数が増えてきた。

間断なく増え続ける援軍を眺めつつアリスは思案に耽っていた。

「あまり手を拱いてる暇は無いぞ」

「分かってるって」

撃鉄を持ち上げ、一か所に集中している警備員の一人に向けて引き金を引いた。銃口から放たれた鉛の弾丸は、数多の警備員を仕切っていた大男の脛を打ちぬいた。男は一瞬の出来事に呆けた顔のまま前のめりに倒れた。

痛みでもんどり打っている男を警備員達に取り囲みつつ、辺りを見渡し始めた。

アリスは意識を研ぎ澄ませて警備員の一举一動を読み取ると、腰に下げられた革製のガンホルダーから白銀の自動式拳銃を取り出した。マダムから引き継がれたそれは命中精度を高めるために銃身を長めにされた細身の拳銃で、銃口には減音器が取り付けられている。「最初からそれを使えばいいものを」

クラフトはホルスターの中から説いた。

「これは私からの宣戦布告だよ」

不敵な笑みを浮かべるアリスは真正面から警備員の塊の中に姿を

現した。

それなりに特別な訓練を受けた警備員にとって単身で乗り込んできたアリスは格好の餌食であったはずだが、現実はそのほど甘くない、一人、また一人と脛を中心に撃ち抜かれていった。

自分の背丈より幾分も大きい男達が懸命に助けを求める様は、アリスの中に義憤を生み始めた。

（何故、こいつらを野放しにする？ まさか、お前はこいつらにされたことを忘れた訳ではあるまいな？）

（そんなこと無い）

（ならば、殺せ）

内から意識が入れ替わり始めるのを知覚すると、アリスは咆哮した。

「止める」

徐々に持ち上がる右手を左手で抑え込むが、必死の抵抗むなく、倒れこむ男に向けて引き金は引かれた。

そこから先は一方的な殺戮であった。問答無用で引き金を引いていったアリスのジャケットには、返り血と飛び散った脳しように付着している。

埠頭に響く断末魔が途切れると、潮風が血まみれの頬を撫でた。

「これで君は満足なのかい」

虚空を見上げるアリスの頬に一筋の涙が零れた。

「アリスを傷つけることはこの私が許さない」

「それがアリスの意志に反してもかい？」

「ああ………」

涙を血ぬられた手で拭うと、高らかに笑い始めた。

第3部

暗闇の中、マダムは籐椅子からすつと立ち上がりブラウスからマツチを取り出すと、頭薬を勢いよく擦って火を灯し天井に吊るされた洋燈ランプに火を点けた。コンクリの壁に照らし出されたマダムのシルエツトが、洋燈の明かりに合わせて艶めかしく揺れる。映し出された自分の影をしげしげと見つめると、一枚一枚丁寧に上着を脱ぎ始めた。

チュールレースのブラジャー姿で鏡台に立つと、マダムは艶っぽく笑った。

「こんな姿はアリスに見せられないわね」

全身の至る所に人工皮膚が移植され継ぎはぎだらけの姿を惜しげもなく晒すと、灰皿から吸いさしを取り出し火を点けた。

しばしの休息の時間。一息一息を意識しつつ紫煙を撒き散らす。

マダムは煙草の先端に息を吹きかけ灰を落とすと、

「時間稼ぎをしなくては」

腰に掛けられていた襟巻を自分の首に巻き下着姿のまま部屋の奥に身を寄せ、洋燈の火を消した。

乳鉤が打つてある木製の扉を叩く音が響き渡る。

「こんばんは、お姉ちゃんはいらる？」

この界限ではけつして相容れないであろう少女特有の甘ったるい声が扉越しに伝わった。マダムはそれを無視し、腰に吊り下げられたホルスターから拳銃を抜き取り遊底をスライドする。

「あれ、おかしいな。ここにいてお父様から聞いてきたのに」

次第に声が震え始め、扉を叩く音が強くなっていく。

「出てくれないと、勝手に入っちゃうよ」

扉が開いた音を確認すると、マダムは扉に向けて弾丸を放った。

「どうしちゃったの、私のこと嫌い？」

街灯に照らし出された少女の顔に、引きつった笑いが浮かんだ。
「そんなに怖がらないで、お・ね・え・ち・ゃ・ん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1149u/>

アリス・イン・アンダーランド

2011年11月23日19時46分発行